

安心して学ぶことができる集団づくりに向けた教師  
の働きかけ：  
関係性に着目した教師視点の変容と定着

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 崇範 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007726">https://doi.org/10.14945/00007726</a>

# 安心して学ぶことができる集団づくりに向けた教師の働きかけ

—関係性に着目した教師視点の変容と定着—

土屋 崇範

How Teachers Can Manage Their Classes So That Students Are Able to Study with Composure:  
Student Interaction and a Multi-Perspectival Approach

Takanori TSUCHIYA

## 1 問題の所在

「集団の中だからこそ成長できる。多様な価値観，深い思考力，豊かな表現力，幅広い人間性などの生きる力が身につく」これが学校教育の意義ではないだろうか。学校や教師の努めは，一人ひとりの生徒が意欲的に学び，健全な生活をする環境を保証することであるといえる。しかし，いじめや不登校，学級崩壊など学校をとりまく問題は多岐にわたり，生徒や教師が困り感を抱えていることは論を俟たない。平成23年度の文部科学省調査によると，中学校におけるいじめ認知学校件数や校内暴力発生学校件数の割合が約50%，不登校の生徒が約3%となっている。問題行動生徒も被害生徒も一般の生徒も含めた多くが，困り感を抱えていると想像できる。そして，教師自身も支援介入策がなく，困り感を抱え，悪循環に陥っていると考えられる。

## 2 実態の把握

静岡県内8つの中学校教師180人を対象に質問紙調査を実施し，重回帰分析を行ったところ，やりがいがあるなどの「教師の学校へのフィット感」因子に影響するのは，生徒の悪いところばかりが気になるなどの「問題行動へのとらわれ」因子であることが示された

(図1)。木村(2003)は，「形式的指導にとらわれるほど，子どもたちの教師不信，人間不信が増幅される」と指摘している。つまり「教師の学校へのフィット感」を向上させるために，問題にとらわれない見方や生徒との良好な関係づくりの視点を獲得する必要がある。

図2は，A市立B中学校の1年生から3年生の生徒268名に対して質問紙調査を実施し，因子分析後に重回帰分析を行ったものである。学校は楽しいなどの「学校享受感」を向上させるためには，教師が授業や生活の場面において，友人のがんばりは自分の励みになるなどの「友人とのつながり感」を安定して保証す

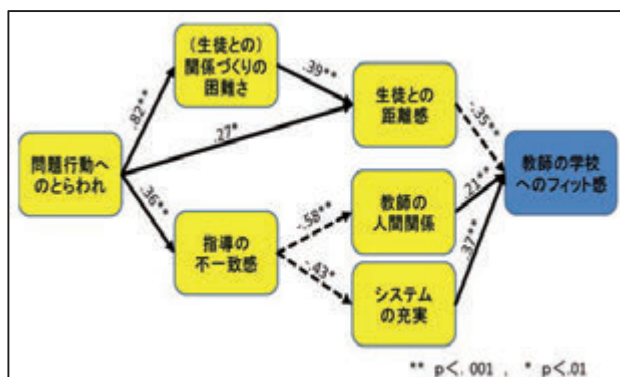


図1 「教師のフィット感」に影響する要因の関連構造

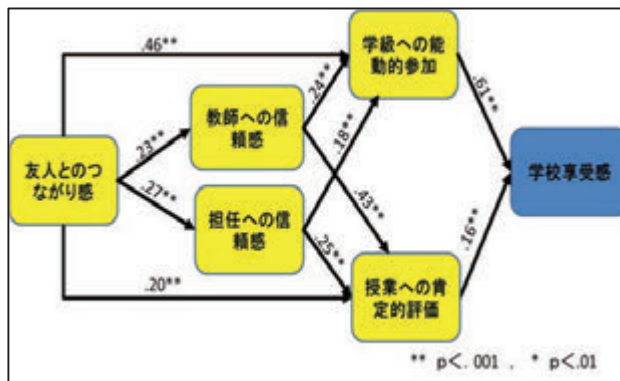


図2 生徒の学校享受感に影響する要因の関連構造

ることが重要になることがわかる。教師が、「友人とのつながりを深め合う場を設定し、関わり合いを保証するアプローチ」を行うことで、学級活動や学習が安心して行われることが予想される。

### 3 研究の目的と方法

生徒個人における困り感への対応については多くの先行研究で報告されているが、学級を念頭に置いた集団における個への対応に関する研究は少ない。そこで、困り感を抱えた生徒が、集団の中で安心して学ぶことができる方策を探ることとし、親密な友人関係を希求する青年期の生徒同士の関係性（友人とのつながり）に着目し、生徒間の質の高い相互作用を促すための方策を検証することとした。また、悪循環への支援介入策として、「問題へのとらわれ感」を軽減する教師視点が必要である。とらわれない見方や生徒が前向きになれる視点を獲得するために、教師間のリフレクション等による「生徒の関係性を分析し、働きかける」という暗黙知を明示化するための方法について検討を行った。

本研究の目的は、「教師・問題行動生徒・一般生徒という学級集団を構成する人間関係から、生徒の荒れや個々の困り感に対する支援介入策を友人関係や集団の中に見出し（見る）、教師が得た見方（分析する）で生徒に関わる（価値づける）ことで、生徒が安心して学ぶ場を構築できるかを探り、その実践により教師の力量形成につながるかを検証していくこと」である。また、「その見方獲得のための情報共有が、教師の変容につながるか」についても検証した。そして、「生徒を見る→分析する→価値づける→教師の共有」のサイクルが効果的に行われることで、安心して学ぶ集団になると仮定し、アクションリサーチを実施した。

### 4 [アクションリサーチ I (AR I)] 教師の意図的な視点構築の効果（短学活における実践）

#### (1) AR I の目的と内容

B 中学校 3 年生とその担任（40 代男性 I 教諭・20 代女性 J 教諭・20 代男性 K 教諭）を対象に、7 月中旬の 5 日間、教師の意図的な視点構築のための介入として、次のような働きかけを行った。生徒の関係性に着目した教師視点とその分析方法、関わり方の重要性に気づくため、清掃、休み時間等における生徒の生活を「見て」「分析」したことを、短学活で伝え「価値づけ」ることを通して、生徒の学級への意識に変化がみられるかどうか検討した。また、教師実践の具体を蓄積し共有し合うことで、生徒に対する問題や良さに気づく視点を拡充できるか探った。

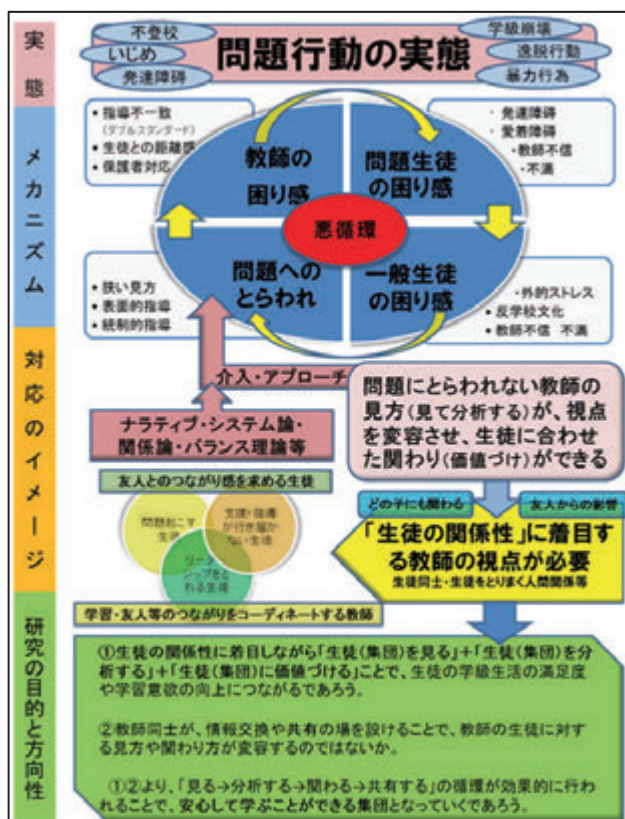


図3 研究のイメージ

## (2) 質問紙調査による生徒の変容

生徒質問紙調査の因子分析を行い、得られた因子ごとの得点の平均値を事前事後で比較した。『生徒の生活の様子を、生徒の関係性に着目して「見て」「分析し」、短学活で「価値づける」という実践において、生徒の学級への感情に有意な影響は見られなかったが「短学活への忌避感」

に対しては、有意な傾向が見られ（表1）、特に経験年数の浅いJ教諭とK教諭の学級では、大きな変化が見られた。「関係性を見る→分析する→価値づける」の一連の行為が、「生徒の短学活への忌避感」に影響を与えることが明らかになった。

表1 t検定による生徒質問紙調査事前事後の変化

	1回目	1回目	2回目	2回目	母平均の差の検定	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t 値	有意確率
学級享受感	3.31	0.80	3.32	0.74	-0.09	0.93
学級での成長意欲	3.17	0.84	3.25	0.74	-0.69	0.49
短学活への前向き姿勢	2.78	0.75	2.92	0.63	-1.29	0.20
短学活への忌避感	3.59	1.03	3.35	0.85	1.70	0.09
先生の話への距離感	2.70	0.72	2.70	0.73	0.05	0.96

## (3) 各教諭の短学活における発話の変化

AR I 前の6月に観察した短学活の教師発話と AR I 期間中の発話を比較したところ、各教諭の話の内容に変化が見られた（図4）。6月には指示や注意が多かったが、AR I 期間中は減少した。また、「嬉しそうに聞く姿が多かった」「温かく話を聞いてくれた」「頷きながら話を聞いてくれた」等、生徒の変化を感じると各教諭の感想が聞かれた。さらに、各教諭の意識変化もみられるようになり「よいところを見た方がお互いにいい」「反抗的なCさんが顔をあげて聞いてくれた」「生徒を観察分析して見えなかったことが見えてきた」等、教師自身が見方を変えることの必要性を感じ、その効果とやりがいと楽しさを実感する発話が多く聞かれた。つまり、「見る」「分析する」を意識することで、様々な立場で見て、生徒目線で分析することができるようになったと考えられる。問題へのとらわれの軽減や価値づけに対する意識の変化が成果として示されたといえる。

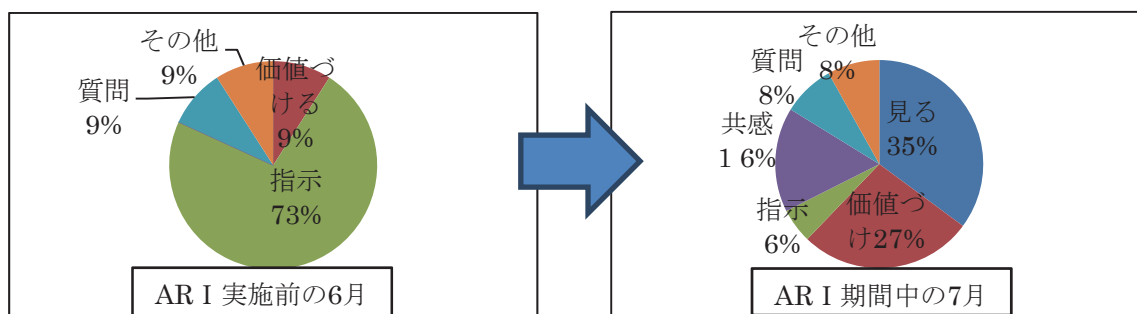


図4 J教諭のAR I前後の発話記録の分類と比較

## 5 [アクションリサーチII (ARII)] 授業における教師の働きかけとその変容

### (1) ARIIの目的と内容

AR I 後には各教諭から「授業を通して一連の行為を行いたい」という発言があったため、「授業」に焦点をあてARIIを実施した。対象は、B中学校3年生の生徒と各担任とし、教科担任4名も参加した。内容は、『各教諭が「授業」を通して「見る」「分析する」「価値づける」を行い、視点を獲得するため、週2回「共有の会」を20分程度行う』である。期間は10月中旬から1か月間で、生徒及び教師の変容を検証した。

## (2) 「学級享受感」と「学習意欲の向上」に影響する要因

授業に対する生徒実態を把握するため、ARⅡ前に事前質問紙調査を実施し、B中学校3年生、84名から有効回答を得た。調査項目は、「学級満足度」「授業学習への感情」など5尺度で合計56項目である。因子分析後「学級享受感」など10因子が抽出された。

生徒にとっての学級は、安心して学ぶ環境でなければならないため、「学級享受感」と「学習への意欲」に影響する変数間の関係を重回帰分析によって調査した(図5)。生徒が本音で語り合うなどの「内面的友人

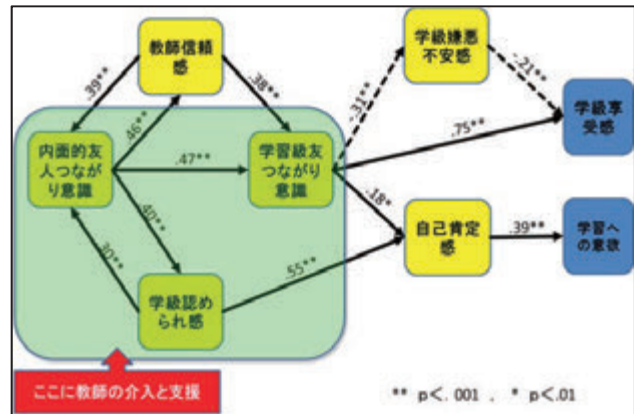


図5 「学習意欲」「享受感」に影響する要因の関連構造

つながり意識」のもてる授業を行うことで、友人の意見は参考になるなどの「学習と級友つながり意識」と「学級認められ感」が向上し、「学級享受感」と「学習への意欲」につながり、安心して学ぶことができる環境が構築できることが示された。また、ARⅡの方針と図6の『学習(授業)の中で、生徒のつながり(関係性)を見て分析して価値づけること(学習と級友をつなげ、認め合う活動を行う)で、学級での安心感や学習意欲が向上する」という結果も示された。

## (3) 事前事後質問紙調査の比較検討

事前・事後生徒質問紙調査を実施後、各因子項目の平均値を算出し、対応のあるt検定を行った(表2)。その結果、授業を通して生徒が本音で語り合うなどの「内面的友人つながり意識」を向上させる場や、学習と級友を結びつける「学習と級友のつながり意識」を高める授業の工夫、お互いの言動を認め合う「認められ感」の場を設定することで、「学級嫌悪不安感」や「学級での怠惰行動」が減少し、「教師への信頼感」や「自己肯定感」が高くなることが示された。また、ARⅡの目的である「学級享受感」と「学習への意欲」が向上することも明らかにされた。ARⅡを通して、学級の中で安心して学ぶことができる環境が整うことが示されたといえよう。

表2 t検定による事前事後質問紙調査の比較

	対応サンプルの差			t 値	自由度	有意確率(両側)	
	平均値	平均値の差	標準偏差			有意確率(両側)	有意確率(両側)
学級充実感Ⅰ	3.51	-0.29	0.58	-4.49	80	0.000	0.1%水準 ***
- 学級充実感Ⅱ	3.80						
学級認められ感Ⅰ	3.27	-0.37	0.71	-4.62	80	0.000	0.1%水準 ***
- 学級認められ感Ⅱ	3.63						
学級嫌悪不安感Ⅰ	2.79	0.20	0.79	2.33	80	0.022	5%水準 *
- 学級嫌悪不安感Ⅱ	2.58						
学習と級友のつながり意識Ⅰ	3.61	-0.57	0.63	-8.20	80	0.000	0.1%水準 ***
- 学習級友のつながり意識Ⅱ	4.18						
学習への意欲Ⅰ	2.92	-0.75	0.67	-9.97	79	0.000	0.1%水準 ***
- 学習への意欲Ⅱ	3.67						
授業への怠惰行動Ⅰ	2.54	0.22	0.90	2.15	80	0.034	5%水準 *
- 授業への怠惰行動Ⅱ	2.32						
内面的友人つながり意識Ⅰ	3.65	-0.35	0.66	-4.83	80	0.000	0.1%水準 ***
- 内面的友人つながり意識Ⅱ	4.01						
表面的友人つながり意識Ⅰ	2.53	0.15	0.67	1.99	80	0.050	5%水準 *
- 表面的友人つながり意識Ⅱ	2.38						
教師への信頼感Ⅰ	3.55	-0.26	0.73	-3.20	80	0.002	1%水準 **
- 教師への信頼感Ⅱ	3.81						
自己肯定感Ⅰ	2.95	-0.22	0.90	-2.16	80	0.034	5%水準 *
- 自己肯定感Ⅱ	3.17						
自己否定感Ⅰ	3.04	0.17	0.91	1.65	80	0.102	
- 自己否定感Ⅱ	2.88						

#### (4) 発話分析による生徒の変化

表3は、ARⅡ後に「認められ感」か「学習への意欲」が低群（BさんとEさんとFさん）と中間群（AさんとCさんとDさん）の生徒6人にインタビューをして得られた発話を、KJ法の手法を用いてカテゴリー化し、どの分類について発話しているのかを示したものである。

「関わりの充実感」と「関わり合う学習の魅力と学びの深まり」のカテゴリーは、ほぼ全員の発話に見出され、関わり合う学習が生徒にとって有効な手立てとなっていたことが伺える。「協働と学びの相互作用」と「人間関係の深まり」のカテゴリーに関することも同様に、ただの関わり合いではなく、多様な意見や批判的思考の価値にも気づくことができている。

これは、教師が生徒に対して適切な価値づけができていることが要因の一つと考えられる。そして、人間関係が深まっていることを意味している。つまり「見る→分析する→価値づける」のサイクルが有効に働いていると考えることができるのではないだろうか。だからこそ、「コーディネータ的教師の役割と努力認知」が必要になると思われる。

表3 生徒インタビューによるカテゴリー分類

上位カテゴリー	下位カテゴリー	Aさん(女子)	Bさん(男子)	Cさん(女子)	Dさん(男子)	Eさん(女子)	Fさん(男子)
関わり合いの充実感	関わり合いの享受感	00	0			0	0
	関わり合い希求	0	00	0			
関わり合う学習の魅力と学びの深まり	多様な思考交流の享受	00			000		
	関わり合いの深化・統合・発見の魅力	0	00		0		0
	譲り合いや批判的思考の学ぶ喜びと学力定着	00	00	00	0	00	00
協働と学びの相互作用	認められ感			0000		00	0
	関わりあいによる意欲向上とその相互作用	00		000	0	0	0
	学級成長と努力姿勢の向上	0	0	00	00	00	0
受験意識	受験の影響	0	0				
	テストの向上	0	0			0	
人間関係の深まり	学習と級友のつながり意識	00		000			
	級友との人間関係の向上	00		0	00		
コーディネータ的教師の役割と努力認知	教師のコーディネータ的役割要求	000			0000		
	努力認知欲求	00		000		00	

#### (5) 共有の会を通じた教師の変容

水曜日と金曜日の放課後に、対象教諭とARⅡへの参加教諭による「共有の会」を20分程度実施した。その際に、「見たこと」「分析したこと」「価値づけたこと」を報告し合い、感想を述べ合った。全8回の「共有の会」で集まった36の見方や価値づけ方を、KJ法の手法に基づいてカテゴリー化し、「行為の再構成」「価値の転換」「個人内(集団内)評価」「具体の活用」「接続語着目」など13のカテゴリーに分類した。表4は、第1回から第8回の共有の会において、I教諭が報告した見方・価値づけ方を、①と表記し、色づけしたものである。ベテランのI教諭は、幅広い見方や価値づけ方を身につけているが、前半部分において見方・価値づけ方のない部分がある。そして、他の教諭の報告の後、新しい価値づけ方を身につけている。つまり、ベテランであっても共有することで、新たな見方・価値づけ方を獲得もしくは想起することができているということがわかる。新採3年目のJ教諭もK教諭においても同様の傾向がみられた。つまり、共有の会を行うことで、他の教諭の暗黙知としての見方や価値づけ方を知り、それを自主的に獲得して活用していることが明らかになった。このような共有の会を一定期間連続で行い、他の教諭の見方や価値づけ方の具体を知ること、教師自身がそれを活かしたとすることができる。1人の教師の見方や価値づけ方は狭いものであり、教師集団がお互いの価値観や見方を共有していくことは重

要であることがいえる。また、一度獲得した見方や価値づけ方は、参加教師の内面に位置づけられ、様々な場面で活用できるということが示唆された。教師インタビューの結果からも、「共有の会における教師の見方の変容や拡充」や「共有する場面を設けることの必要性」など、実践的で力量向上につながるという発言が多く語られた。

## 6 全体的考察

アクションリサーチの結果、教師の意識の変化や力量形成の向上が見られ、同時に生徒の学

級に対する意識や学習への意欲、友人関係にも変化がみられた。この『生徒の関係性に着目して「見て」「分析して」「価値づける』という一連の行為が繰り返されることで、教師の視点の変容が見られたこと、教師集団が、暗黙知である「見る」「分析する」「価値づける」の情報交換や共有をすることで、教師の見方や価値づけ方を拡充したということが明らかになった。そして、生徒が安心して学級生活を送り、学習に対し意欲的に取り組む姿に変容していくことが示された。

同時に、3つの課題が明らかになった。まず、教師に視点をあててみると、学校現場には共有のための会議や話し合いの場を定期的に設けている余裕も時間もないということである。職員室の中で自然発生的に共有し合うような場を意図的に設定する必要がある。さらに、「見て」「分析して」「価値づける」という一連の流れを意識してコーディネートする役の存在が必要になる。次に、見方の少ない教員との共有の会は無意味なものと考え教師に対して、意義を実感してもらうことが必要となる。「各教師の感性の問題」で片づけてしまうのではなく、暗黙知から明示知への転換ができるような働きかけを考えていきたい。最後は、生徒に視点をあてたときに、ただの関わり合い学習をしているだけでは「思考が深まらない→学校がつまらない→授業がつまらない→思考が更に深まらない」という悪循環につながってしまうということである。授業での関わりは、教材を通して生徒に様々な価値を伝えるため、必ずその教材に対する研究や生徒の実態に対応する力が必要である。これは、全ての教師のテーマであり永遠に追求していくべきことであろう。

本研究が研究の終わりではなく、新たな教育実践と研究の始まりであると考え、今後、さらに成果と課題に対する研究を重ね、よりよい教育を生徒たちに提供できるようにする責務を感じる。

### 【主要参考文献】

加藤弘通 2007 問題行動と学校の荒れ. ナカニシヤ出版.

久我直人 2012 優れた教師の省察力:よりよい「学級経営」に大切なこと. ふくろう出版

木村浩則 2003 つながりの教育. 三省堂

表4 I 教諭の見方・価値づけ方の変容

	見方の転換			課題解決への工夫			人間関係づくりの促進			意欲・主体性の向上			
	行為の再構成	価値の転換	個(集団)内評価	具体の活用	接続語着目	批判的思考	相手尊重	相手立場	関係性	拡張・深化	意欲・主体性	成果のFB	コーディネート
第1回	①	①		①								①	
第2回	④	①	④								②	①	①
第3回	④	④L	④		①		④④		④	①	④K		
第4回	④J ④N			①			④J ④M		④KM ④N	④IK ④N	④K		④N
第5回	④JK ④MN	①	④	①			④MN ④ML	④ML	④IK ④MN	④K	①		④J ④LM ④N
第6回	④		④		④MN	④IN	④J ④N	④N	④KM ④N	④IK ④MN	④K	④IN	④J ④M
第7回	④N		④N	④IM	④K	④N	④IM ④N	④IK ④N		④J	④N	④JK	④J ④N
第8回	④IM		④		④K	①		④IK	④M	④IM	④J ④K	④J	④K

